

第5回 佐倉市におけるこれからの学校のあり方懇話会

日時	令和7年5月14日（水）午前10時00分から午後11時30分まで
場所	議会棟 6階 第3委員会室
出席者	○出席委員 古賀 毅委員、定野 司委員、辻 太久郎委員、岡島 由夏委員 以上 4名 ○事務局 緑川教育部長、宮崎教育総務課長、松丸学務課長、松原指導課主幹、 舎人社会教育課長、塚越教育センター所長、藤崎主幹、新川主幹、 伊藤主査、大野主査補、榊田主査補 ○傍聴人 2人
配付資料	・次第 ・資料1 これからの学校と地域の関わり方に関すること ・資料2 （仮称）佐倉市におけるこれからの学校のあり方に 係る基本方針について（第2章・第4章）
議事	① これからの学校と地域の関わり方に関することについて ② （仮称）佐倉市におけるこれからの学校のあり方に係る基本方針について（第2章・第4章）

1 開会

2 議事

【議長】

それでは次第に沿って進行してまいります。事務局より、議事の1について、説明を求めます。

～議事① これからの学校と地域の関わり方に関することについて～

【事務局】

（資料1に基づいて説明）

【議長】

学校と地域の関わり方あり方についてのお話でございました。

私の方から先にコメントを言いますと、教育界での専門用語として学社連携と言われたのが多分70年代とかです。その後、学社融合まで進むのだというような議論も出たのですが、2000年代に入ってからかなりトーンダウンした印象がありまして、ところがコミュニティスクールのところで蘇ってきているような印象です。この間にどんな変化があったのかというと、最大の変化はですね、地域社会の底が抜けているということです。これは都市部でも関わりが薄くなっているし、農村部は過疎化・高齢化が進んで、コミュニティそのものの活用やその優位性がなくなっていることがあります。

この後ご議論いただくような運営協議会の枠組みについても、半世紀ぐらい前までの日本のあり方としては、おそらく地主さんとかですね、専業農家さんが結構いて、そういう方が中心になって地域の教育を支えておられた筈なのですね。同窓会とかPTAも、そういうところに乗っかっているところが相当ありました。しかし、産業構造が変わって、要はサラリーマンがほとんどになってきまして、そういう意味では、都市部も農村部も、その地域という実態を支える方がいなくなってきたのですね。

私は今高等学校の方で学校運営協議会をやっておりまして、この前も新年度の会合が開かれたところでございます。これから県立高校は全部コミュニティスクールにしていくということになりましたので、工業高校のような、ちょっと今普通科重視というか、多くのご家庭は普通科志向が強いので、少しメインストリームからズレてきたところですから、尚更そういういろんな目で学校のあり方を考えていくという、大切な場ですね。非常に毎回活発な議論があって、どなたも熱心に参加してくださっています。それも学校がちゃんと聞き届けてくださっています。ただやはりですね、一つは委員の構成が、直接のステークホルダーになりやすいということと、昼間出てこられる人しか参加できないというのがあって、あとは地域の自治会長とか多分高齢の方がいらっしゃるし、商店街の方がですね、そういう関係にどうしてもなってしまうし、あと学校のOBみたいなものもかなりお年を召した方になります。それが悪いということではなくて、本当のその社会のメインの構成員である、いわゆるお勤めの方が全然こういうところに参加できない。それはちょっと平日の昼間に会議をやっていますので、できるわけがないというのがあります。

あともう一つの問題は、学校側に果たしてこれをくみ取るだけの決意があるのかどうかということですね。率直に言って、学校の教員は中に入ってきて欲しくないというふうに考えている方が結構おりますし、経営とか教務の案件というのは、これはもう専権事項であるというふうに思っていて、外部の人、素人がタッチするなよという、はっきりはおっしゃらないけれども、ということがあります。そうすると、単なるアリバイ的な、ガス抜き的な会議になってしまう。それは確かにそうで、年に何回かしか開かれないので、そういうことになるでしょう。ただ、国はこれを推進するという立場で、法律も改正しましたので、当初は公設民営のようなイメージで言われていたのですね。アメリカをモデルにして、もう学校の運営経営は地域側に委ねるぐらいのことを最初考えていたのですが、やはり学校側の抵抗がかなり強くてですね、今のよう形に、ただの顧問会議のような形に収まっているというのはおそらく現状だろうと思います。

先進的な事例をご報告いただきましたが、よくなさっているところというのは、ちゃんとそういうバランスが取れていて、プランを立ててですね、やられているのだなというふうに思っています。

ということでそれぐらいにしておきます。市民委員さんにお伺いしますが、この制度をご存知でした？

【委員】

この制度は初耳でした。

【議長】

そのお立場で、今の印象とか感想をお聞かせください。

【委員】

最初これ見た時はとても良いなと思ったのです、単純に。お話聞くと、学校との摩擦があるかなというのも感じて、その話を聞く前は、すぐにでもやってほしいなというか、いろんな人が関われるというか、自分はまちづくりみたいな、地域の活動をずっと10年以上やってきていて、まず知られないと使ってもらえないみたいなところをずっと悩んでいたのですよ。

でも学校は、とても自分の中で壁があるなと、ハードルが高くて、さっきそれこそお話あったように、むしろ入って欲しくないのかなと思っていたので、こういう考え方があるのだと、そうすれば、我々みたいな地域を作りたい、まち作りをやっている者も、入りやすくなって知ってもらえる機会が増えるかなというふうに、これを見たときに思いました。ぜひやってほしいなと思います。

【議長】

まさにそういう狙いでやる筈なのですね。そういう意志のある方ってたくさんいらっしゃると思うのですが、なんかミスマッチになっているのでしょうかね。

【委員】

これだと、いわゆる表に出ている人、例えばPTAの会長など、何か肩書きがある人みたいなものをイメージすると思います。地域の人にはそこまでいかないけど、熱意がある人がいっぱいいると思うのですよ。で、その人たちがいるのだけど、やっぱそれは知らなかったら、役に立たないというか、我々みたいな熱意持っているだけで、空回っちゃうというか、自分の範囲で一生懸命皆さんやっていくけど、学校にまでは届かないというのがあるので、一般のそういう肩書きがない人でもここに入れるような、例えばその何か認定制度があるとか、市の中で何かそういう仕組み作りみたいなものがあるとかで、きっと信頼があるからこういう人たちを選ぶと思うので、そういう仕組みがあると、自分たちもチャンスが、学校に入れるチャンスがあるかなというふうに感じます。

【議長】

ありがとうございます。学校側の立場から、いかがでしょうか？

【委員】

うちは学校運営委員会があります。やっているのですが、特にこのさっき事例で出たような、いわゆる先進的な凄いことをやっているわけじゃなくて、ただ協議会の皆さんがいてくれてよかったなというのもたくさんあります。抽象的な言い方しかできないのですが、私としては後ろ盾ができた、そこがやはり安心感というか、そこがすごく大きいです。後ろ盾と同時にいろんな分野へのコネクションができた。だから、どこかいろいろ課題や問題が発生した場合には、この件についてはあの

人に、この件についてはあの団体に、というのが明確になっているので、そこは非常にありがたいなと思います。あとは、ここに参加している皆さんも、自分がどういう立場でそこにいるのかを理解してくださっているので、こどもたちのために「自分達は何ができるか」という建設的な意見をいつもくださるので、そこは非常にありがたいなと思っております。

【議長】

学校側の立場で、地域に支えて欲しい分野とか、こういう方面でとかありますか？

【委員】

一番はやはり学校現場は人がいないので、例えば学習サポーターとか、校庭の管理なんかも意外と大変なので、そういった感じとかですかね。

【議長】

特に小中学校というのは、学校事務員というのはほぼ絶望的にいないので、高等学校はまあまあいて、大学はもう、ほとんど事務方で回っているのですけれども。何故か日本の公立小・中学校というのは教員に全部負わせているという謎の仕組みになっていて、それはむしろ教員免許を持ってなくてできる話なのですけど、何でそうなのですかね。だからその部分もありますし、マネジメントとか、教務関係はちょっと別件だとは思いますが、管理の問題とか、いくらでもできるとは思いますがね。学校運営協議会のメンバーの選出はどのようにやっているのですか？

【委員】

立ち上げ部分はわからないのですが、1人の方が諸事情で辞めたいという時は、その人自身が次の人を見つけてくださっています。

【議長】

属性をなるべく多様にしているということですね。実際にもしこういう中の人になるって訳じゃないですけど、半分中の人になるのだったら、どんな活動をされてみたいですか？

【委員】

自分今、公園活用をしていて、今やっているその公園の活用というのは、単にそこに集まって遊ぼうとかそういうことじゃなくて、その近所の周りに住む人たちがそこで顔を合わせることによって、大人もこどもも知り合って安心安全になるよねという、そういうことを目的にやっていて、大人が整おうとする態度が大事で、そういう大人を見ることがこどもの学びにもなるし、そういう大人にはこどもも集まってくると。で、そういう場所を作りたいと思ってやっているの、そういうことがまずもちろん大事だという話もしたいし、そういう公園の活用が何かこの学校の中で役に立つなら、使って欲しいなという気持ちもあるので、ちょっとまたそれで入ってそういう

話をしていくうちにまた新たなアイデアとか生まれるのかなというふうにも思います。

【議長】

名簿というかですね、人材リストみたいなのを作って、エントリーしていただいて、その中から柔軟にですね、いろんな学校に関わってもらおうというやり方はあると思いますね。学校ってこういうものだという頭が、地域の方も抜けないので、別に活かして開放してもらってもいいですみたいな、既存の枠で考えちゃうのですが、例えばコンビニ作る場合、なんでやらないのかなと思っているのですね。コンビニってただの何か食べ物を売る場所ではなくて、今役所の出先でもあり郵便局でもありますね。ミュージックストアでもあり、おでん屋さんでもあるわけで、地域の、まさにもう他の商店が軒並み潰れる中で、コンビニだけはなぜか残っているというそういうものもやってもいいですし。それから中学生ぐらいの場合ですと、やはり自己肯定感が下がる時期、大人としての自己肯定感を持ちにくい時期なので、社会と結びついて活動することによって、手応えといいますかね、大人たちが自分達を充てにしてくれているのだという、そういう関わりのある、例えばイメージですけど、お店屋さんのなことでもいいですし、何とかセンターでもいいのですが、生徒自身が学業の一環としてそこで働いて活動する。キャリア教育というのはイベント的な職場体験ばかりやるのですが、それこそ曖昧であってですね、職場体験にならないですよね。恒常的な、日常的な関わりで、少しずつでも手ごたえがないと、社会で生きる手ごたえがないと私は思っているのですよ。先程の公園とか、公共施設みたいなものに、もう少し市民も生徒達も関わっていければいいのかもしれないですね。

【委員】

例えば、そういう活動のチラシを1枚配りたい、チラシを学校に配布したいって思っても、何か学校の先生の負担になるからNGになるのですよ。そういうところも、短期的に見ると負担があるけど、長期的に見たら、それいいのかなみたいな疑問も活動しながら思うこと多々あって。何が本質かみたいなのが、全然この伝わってないと、自分だけじゃなくてそれ各プレーヤー、地域のプレーヤーの人は伝わってないと思うのですよ、佐倉市民にもそうだし、学校もそうだし。まずその伝え合うみたいなのが、この運営協議会の手前にあってもいいのかなとすごく思います。

【議長】

今、ICTとかも出ていることなので、一堂に会しなくてもいろいろやりようはあると思うのですね。さっきちょっとお話にも出ましたが、部活動の地域移管というのが、進んでいるのか進んでないのかちょっとあれですけど、今後の課題としてありまして、一つの教員の負担を減らすというようなことで行われてはいるのですが、国内のそういう方向にはなっておりまして、特に運動系の部活動だと、土日に出場とか遠征が入って、その引率を教員がしなければいけないということがありますし、朝練をやったらそれはそれでいかなければいけないし、要は時間外の労働が相当なことになっております。制度的には、教員免許状が保障している教員の専門性というのは、

教科とか、具体的に言うと教科と道徳と総合的な学習の時間と特別活動なのですけど、正規の教育課程の指導が出来るのは教員免許を持っている人だけであって、それ以外は、持ってなくてもできるのですね。部活動は、校長の職務命令があればできるし、なければできないというだけの話なのですよ。だから従来から実は民間人でもできなくはなかったのですけども、ただこれも教員が囲い込んできた、あるいは背負ってきたということが背景にあるということです。今何が起こっているかということ、教員側の問題とあと少子化で部活動が成立しない。ある学校にバスケ部を作ったらもうバレー部を作る余裕がなくなる。人数的に生徒数がない、というようなことが出てきてしまいます。それから適切な指導者がやはりどうしてもいない。ですから、さっきの話でもありましたように、もう放課後の部活動に関しては、学校の枠を取り払って、野球をやりたい人はA中に行って、バスケをやりたい人はB中に行っていくというようなことも出てくるのかなと思います。

一方で、これも先ほどまた報道されておりましたけれど、学校の教員とのやはり法制度の中でガチガチに取り込まれていて、そのマイナス面は勿論あるのですが、ただ研修等を受けてですね、法律に反することはしないですね。今一番問題なのはやはり体罰の問題で、運動部につきものだった体罰とか、地域のおじさんたちがやると、自分たちが部活をやっていた頃のノリでやってしまって、相当この事件が表に出ないだけでもかなりあるし、2、3日前ですね新聞で、専門家の先生が報告していたのを見ると、アンケートを取ってみて、体罰は悪いことじゃないという外部の指導者が3割ぐらい出てくるのです。その前提でやったら本当に怖いです。それからもう一つは、外部指導者はとにかくギャランティが安過ぎる。この手当で部活動を面倒見てくれって言うのは、ちょっとあり得ない数字です。だから言っていることは分かるのですけど、ちょっと現実的にどうなのかというのは今のところはあるかなと。今中学校の方はどうですかね。実際部活動の移管に向けた動きとしては。

【委員】

市が中心に動いています。ただ過渡期だし、前例がないことなので、結構大変かな、不安というか、そちらの方が大きいかなという感じです。これが軌道に乗れば絶対負担も軽減されるし、こども達の利益にもなるというのは分かります。今が踏ん張りどころかなという形ではあります。

【議長】

首都圏ですと、私立の中学校に行く層がやはり結構分厚くてですね、この地域移管みたいなことで私立は制約を受けないので、そうするとですね、こどもの時から、スポーツをやりたい人は、もう私立に行かせるみたいなことは多分出てくるでしょうね。今更どうしようもないのですけれど、戦後の日本のスポーツって、実業団と学校が全部背負い込んできた。地域のクラブって全く、全くではないのですけどね。柔道とか剣道の道場みたいなやつがあれば、あれはクラブチームなのですけど、ほぼ無くてですね。

私が専門にしているフランスは元々部活という概念が無くて、全部草野球など草サッカーとか草吹奏楽とかそういうことで、フランスのことですから地域に必ずスポーツとか芸術の指導者がいるのですよね。Association（アソシエーション）という、日

本でいう NPO みたいな法人格を取らないと、そういう活動もできないです。そういう制度がしっかりしているのですが、おそらくそれも教会コミュニティみたいな宗教的なものが以前にあった流れじゃないのかなと。日本はさっき言ったように、地域社会そのものの底が抜けちゃっている感じがするので、特定の誰かに支えられるみたいなことがあって、例えば、この部活を指導してくださっている方が今年で辞められるので、後が賄えるのかどうか。ちょっと心配ではありますね。

【委員】

フランスの場合、地域のクラブチームの指導者は、報酬などはどこから出てくるのですか？

【議長】

ものによります。だから会費を取ってやっております。また、Association（アソシエーション）は税制上の優遇を受けられております。

【委員】

一つ話戻してコミュニティスクールの話ですけど、確か佐倉市は、白銀小学校で新しいタイプの学校運営を考えようじゃないかということで、学校運営協議会のようなものをお作りになったと記憶しています。何故お聞きしているのかというと、当時、国がそういうタイプの学校を作ろうというモデル校をいくつか指定したのですよ。全国で 10 校ぐらい。そのうちの一つが足立区の五反野小学校というところで、当時、多分同じ時代にそうやって手を挙げたか、指定されてやったという記憶が残っています。平成 15 年前後の話です。足立区はどうしたかということ、地域立を目指したのですね。なので、公立の学校に理事長を置いて、そこに民間の校長を置くスタイルをとりました。上手くいったかということ、今無いから上手くいってないともとれますけど、とにかくその先駆けをやってきたのは確かです。何が起きたかということ、各学校に、学校を支えるチームみたいものがポツポツ出来始めたのですね。それが足立だと普及して、その後、文科省がコミュニティスクールを押し出してきた訳です。地域立というのを考えれば、地域が欲しいとは言っていない学校をなんで作るのだという話になって、今現在多分 100 校足立区には学校がありますけど、10 校から 12、3 校がコミュニティスクールで、あとは学校を支えるそういった文科省という類似団体というやつですね、これがあるというふうになっています。

なので、佐倉市で今、白銀小学校がどのような状況なのかも一緒に教えていただけると、新しい道が開けるのではないかと思いますのですが、その辺はどうでしょうかね。

【事務局】

白銀小学校は、平成 16 年に開校しています。その検討の段階で、様々な地域との学校の協力体制ということで、市としては学校運営委員会というような形の立ち上げをしまして、それは現在も生きているような状況になっています。そこで地域の方々、学校の方でコロナの関係もあつたりしたのですが、コロナ前には授業の支援とかそういったことを一緒にやってきたと聞いています。

【委員】

それが佐倉市全体に広がったということではなかったのですか？

【事務局】

市内でそういった似たような委員会を立ち上げている学校が市内で今、10校というような形ですね。

【委員】

10校あるというのは、ほぼ全校にあるってことですか。

【事務局】

今、市内34校なので3分の1ですね。

【委員】

全校ではないですね。

【事務局】

はい、そういった形で立ち上がっているような状況になっています。状況としてはその他に、例えばまちづくり協議会という形で学校の枠を越えてですね、小学校区単位で、地域の方々が学校に限らず地域を良くしていこうというような活動している状況もあります。

【委員】

なるほど。何が言いたいかというと、まずは何故広まらなかったのかなとか、広げないのかなという点を一つ整理しておかないと、無理矢理コミュニティスクールをやっても、これ他の町でやったってことですけど、形式的に作って終わって、それで設置率を文科省に100って報告して終わりという話ですよ。それじゃ何の意味もないですよ。

なので、私が教育長の時代に、足立区ではあまり無理しないということにしました、無理しないって変ですけど。要するに、名前思い出しました、「開かれた学校作り協議会」という足立区の協議会は、無報酬なのです。ところが、コミュニティスクールになれば報酬出るじゃないですか。そうですね？それが嫌だって言われたのです。お金もらって強制されるのですかって、義務ですか、という話なのです。自主的な活動として私達はやりたいというところが非常に多かったですね。もう一つは、これ先生もおっしゃっていましたが、経営にまでタッチしたくないというところですね。そこのところは他の専門家である先生たちがやるべきで、そこのところまではやらない。ただ評価とかそういったことについては、支援・協力しますよ、という意図で、今2本立てで足立では動いているというところなのですね。

無理矢理作ってやれと言われても、人は動かないというところも頭に入れとかないといけないのは、これまでの話の中で共通しているというふうに思います。

佐倉市はそうやって先進的にやってきたところもあるのだというところを思い出したのでそれを話したのと、当時、足立区でも同じようなことが始まって今どうなっているかということをお伝えして、佐倉市のためになればなということで今お話したところです。

【議長】

確かに先進的なところというのはやる気のある人達が集まるのですが、だんだん制度化してくると惰性的になりかねないというのはありますね。

【委員】

逆に背を向けたりするのですよね。やれって言われると嫌だというのは人間の特性なので。

【議長】

例えば、ある校長が熱心で、積極的にそういった活用をすることはあるのだけでも、校長が数年で変わるとトーンが変わって、お荷物になってしまうことがあります。どちらかというと、教育委員会がちゃんとがっちりモニターしていて、企画も立てて、ある程度枠づけしていく方が、私は良いような気がしています、特に小中学校レベルだと。校長の出来次第でというのはちょっとリスクかなという気がします。

【委員】

その通りだと思いますね。ただその時に、誰が主導権を握るかといったら、やはり地域の方に握らせていかないといけないと思うので、うちでは2本立てでも、普通だったらコミュニティスクールって言ったらそれやれ一っていく訳ですけども、うちの場合は2本立てにしているというところが、足立の場合は要するに選んでいるというところですよ。そういったところもやはり作っておかないといけないのかなと思いますね。

法律があるからやれと言うのは簡単なのですが、実はさっき言ったように報酬が出るし、補助金もつけたのですよ。10万20万少々、要するに自主的な活動もできるように。それでも乗ってこないところの方が多くなってますね。

【議長】

開かれた協議会、委員会時代はあれでしたけど、コミュニティスクールになってから報酬が示されてですね、私は返上しております。年間いっても1万円いかないぐらいですが。

【委員】

いやそうですよ1ヶ月、千円か2千円かそんな話ですよ。そう、数千円の話です。だからその額もありますけど、額もあるので、いや足立としては進めるために年に年間何十万とかですね、そういう補助金を出しましょうと、こういうお誘いもししていました。でもそれでも乗ってこないですね。その金の話じゃないのですね。

【議長】

私がやっていて一番楽しいのは、勿論 PTA 関係の方がいらっしゃるんですけども、元 PTA、お子さんが卒業されちゃった後でも、学校の応援団として我が校に通わせてよかったと実感をお持ちの方がいらして、今、会長をされています。例えば高等学校ですから、営業に行かなきゃいけなくて、中学校の募集をするのですが、我々がやりましょうよってずっと言っているのですね。協議会として頑張っていき、京葉工業高校がいい学校だと思うのでぜひ来てくださとアピールするのです。私も是非やりたいので、今度仕込みをしようと思っているのですが、学校の先生よりもむしろできるかもしれないということもあるし、高校生と一緒にやりたいなと思っております。

【委員】

そうですね、多分高校ぐらいだと。実は、開かれた学校協議会でやっているのは、生徒の面接のお相手ですね。だから高校生なんかもっとそういったことで使えるのではないのでしょうか。それこそ民間企業の方なんかの面接ができるとか、いやあると思いますね。足立では実際にやっています。

【議長】

ありがとうございます。いろいろな話がありましたけど、具体的にこういう取り組みがあるとか、課題があるということをご存じの方いたら、事務局から今までの話全般のところ追加でいただければと思うのですが、いかがでしょうか。

【事務局】

佐倉市では、学校現場の意見を聞く者として学校評議員と、学校運営委員会があります。佐倉市では、当初やるにあたってコミュニティスクールを推進する、もちろんするのも良いのですが、学校運営委員会というのを、その当時、全くコミュニティスクールの制度化と同じタイミングで立ち上げています。だから、佐倉市独自のそういう仕組みを立てたという状況になっています。ただ、運営委員会の活動についても、まず先程お話していた事業もそうなのですが、やはり例えば団体によって先程言った高齢化や、あとは学校と中々連携が取れないなど、いろんな課題を抱えているのが現状でございます。それらを今後、整理をしていきたいと思いますということで今回、学校運営協議会の設立に向けた準備を行っています。

それに先駆けまして、この学校運営協議会においては、まず学校さんがもう地域の方が入っているもので差し引いてでも、まだ学校運営上で今困っていることを挙げていただき、それを解決するための議論をするのが運営協議会に、プラスそれを実際に叶えるためのものとして、地域学校協働活動というものを行おうとしているのが今の佐倉市の対応です。地域学校協働活動については、実を言うと、昨年の6月に立ち上げてスタートしています。ちょっと話が飛んでしまうのですが、昨年の6月ぐらいから事業を開始して、具体的には、例えば夏休みの学習支援、それから通常の学校での授業の補助、それから特別支援学級の補助とかですね、あと部活動を支援してもらいたい、また環境美化をやってもらいたい、それから佐倉市では外国人の方が多い

ので日本語教育にちょっと携わってほしいということで、実際には昨年からは始まっています。具体的にこれを担っている地域の人材としては、大学生が今一番多いです。大学生、高校生、それから先ほど言いました、元PTAの方、それから教員のOBの方などに、今活躍していただいています。逆に学校の方からは、始まったばかりではあるのですが、人員不足の中で教員の負担軽減に繋がったというようなご意見があったり、例えば部活動の支援に大学生が入ってくれたことで、部活動が活発になったとか、あと児童にとって貴重な体験の機会が増えたというような感想をいただいています。今年度につきましても、広げていけるよう進めていくところです。

それと他に地域学校協働活動の一環として、放課後こども教室を市内4校で始めました。これについては、実際には放課後の児童の安全安心な活動拠点ということで、学校の体育館とか校庭とか、余裕教室などを活用して、スポーツ、勉強を様々な体験活動を現在行っています。

佐倉市でなぜスタートしたかという、スタートは勿論、文科省のコミュニティスクールを進めるという面もあったのですが、やはり学童に入る児童が多い学校がありまして、そこを中心に初めています。12月にスタートしましたが、4校で今300人以上登録されていて、放課後の居場所として今活動しています。どれもこれも、やはり学校が今抱えている課題点と、既存の学校運営委員会、それから地域でいろんな活躍されている方と、中々そこをこう上手くマッチングをしていってやるようなものができればということで、運営協議会を今後立ち上げて、将来的には学校運営委員会がそのままスライドするものもあるでしょうし、例えば学校評議員さんもそちらにスライドするパターン、いろんなパターンがあらうかと思うのですが、そこは今年度学校を回って行きながら、学校に合った形での運営協議会のスタイルを作っていく予定で今進めています。

ちょっと話が飛んでしまいましたが、学校によってその地域の方が入っている状況が色々過ぎてですね、なかなか状況って難しいところであるので、今後そういうことを踏まえて、学校の今抱えている課題をちゃんと出した上で、それに合った形を整えていく、というのが今年度の予定というところです。

【議長】

大変心強いご報告だったと思います。最初の報告のところで市民委員さんがおっしゃっていたような、この地域の中で参画したいという方はたくさんいらっしゃるんですけども、ここのミスマッチをどうにかするというそのプランを立てないといけないですね。

【事務局】

そこがですね、あまりこう言うのもあれなのですが、なかなか地域の方がやりたいことと、学校が課題って抱えていることは、なかなかマッチングしそうでしなかったり、絶対これは私、私も地域活動をやると思うのですが、これ絶対生徒のためになるよって私は思っているのですが。学校側は、それはちょっとという形で、なかなか上手くマッチングができないところがあります。確かに、言い方悪いですけど、私なんかもちっと押し付けているのかなと思って反省するところもあるのですが、そこで活動を知っていただくために、チラシを撒くことも、本当に学校の負担

を考えて、チラシを撒くところからマチコミメールの方に切り替えるなどして、いろいろ試行錯誤中です。なので、活動しているもの等がもしあれば、ご相談いただければ今後進めていけるかなと思います。

【議長】

制度上の弱点というのは、足回りが学校側なのですね。つまり事務局、協議会事務局が学校側になっていて、しかも先生がいなくて、どうしても限界がございます。だから、学校が引き続き構わないのですけれども、1人やはり専任の外部の事務局長みたいな人を置かないと機能しないと思います。つまり、学校からニュートラルな立場で、日頃の教務と関わり無く、今おっしゃったようなことを推進できる、采配できるような方が、イメージとしては学校の中にいるという感じで、いないと厳しいかなと思いますね。

【事務局】

おっしゃる通りですね。文科省のプランの中には、地域にいわゆるコーディネーターを置きなさいという話になっていて、実際に担っているのは教員のOBの方が担っているケースが多いです。ただ、やはりちょっと私達もスタートが難しいところがありまして、現在はコーディネーターというものは置いてはいないですけども、一応その役割としては、実際に学校のサポートに入ってくださっている方に、今はその事業に関してのコーディネートをお願いしている、というようなところです。だけど難しい、一番の課題です。実際はもう正直、我々事務局の方が担っているケースが多いです。

【議長】

だからそう、本業のある方がやはりその、片手間でどうしてもやるということになると、常時そのことばかり考えることができるわけではございませんので、ですからそのあたりはリタイアされた方ですかね。役所関係でも、結構界限にされている方いらっしゃるのではないかと思いますし、あとは割と自営業とかフリーランスに近いような形の方であれば、やっていただけるのではないかと思います。

【委員】

やはり困りごとというと、学習の方に目がいくし、問題となるとやはりそこが出てくと思うのですが、勿論それも一つのジャンルというか、学習の面、部活とか、学校の美化作業とかであつたりとかも必要ですが、親と子の心を育っていることが絶対的に必要で、でもこれは問題にあがりにくく、意識にあがってきません。あがるのは、分かりやすい課題である学習とかの方に行くと思うのですよ。だけどまずは2本柱というか、やっていかなきゃいけないなとずっと思っているというか、それは地域全体がそうであって欲しいなというのをずっと思っていてやっています。どうしても心を育てるみたいなことは、二の次になっちゃう、手が回らないのも分かりますが、そこも視野に入れて欲しいなと思って、2本の柱で本当にやって欲しいなと感じます。

なので、学校の中の話聞くことと同時に、地域で活動している人たちの話を聞いて、使えるところを学校に提案してもらえれば一番いいなと思いますが、でもやっぱり聞かなかつたらもう話が始まらないなというふうに思うので、まずはその二つの大きな枠がついていう視点も大事かなというふうに思っています。

【委員】

さっきのコーディネーターの話ですが、その必要性は本当に感じます。学校と外部ボランティアさんと直でやるというのは、結構いろいろな軋轢があったり、これ学校が言わなきゃいけないのかなとかあるし、あとは一般の方と学校という世界の感覚の違いみたいなものが結構あるのですよね。先生がおっしゃったように、外部指導者が、部活で「下手くそー」とか「馬鹿野郎」みたいなのを言ったら、教員がもしそういうことを言えば、あつという間に叩かれます。学習指導でも、「こんなのもわかんないの？」などと言われると、バカにされたって。それも学校側がじゃあやってくださいと言うべきかなど、一般の人たちと学校との差を埋めてくれる、あるいは繋いでくれる人材は、すごく必要だなと思います。元教員とかの立場の人がその辺はうまくやれるのではないかと思います。必要性を凄く、常に感じています。

【議長】

学校という中では宗教が違うぐらいの感じがしばしばしていまして、なんだろうなと思ってはいるのですけどね。私はだいたい学校寄りのつもりではいるのですが、時々、外の人だったかと自覚することもあったりはします。

【委員】

僕が言いたかったのは佐倉市、他のたくさん例を出して、コミュニティスクールのことをご説明されていますが、先進的というか歴史的にいろんなことやってきているという自負を是非持っていて、そして今の課題を今整理されていますから、それを進めていくということでもいいと思うのですよ。

やはり学校にもそういった人材が必要だということであれば、副校長・副校長補佐を置くとか、あるいは教育委員会の中に、足立区であれば開かれた学校作り協議会の担当者がいますけど、そういった人間を置くとかということも発想として出てくると思うので、是非そのまま進めていただければなと思います。

～議事② （仮称）佐倉市におけるこれからの学校のあり方に係る基本方針について
（第2章・第4章）について～

【事務局】

（資料2に基づいて説明）

【議長】

はい、どうもありがとうございます。懇話会として、大きな方向付けみたいなのところに関わっていかなければならないということですが、ちょっといきなり大きな話になるので、例えば13ページのキーワードが一体的に示されていましたが、これを見てもうほぼ全ての問題が出揃っているとは思いますが、実際にどうするのかというところはあるですね。それと、今までもずっと議論してきたように、どこがうまくいっていないのかという課題の部分が前提になってくるのだらうと思います。人が変わらないし施設も変わらない、予算も変わらないので、そんなに劇的な効果が無いのであれば、優先順位をつけたり、どこかに注力するというそこを示したりということもあろうかと思います。

まず、学校教育現場の感覚として、テーマをですね、バランスとか、偏りみたいなものに関して伺いたいです。

【委員】

このキーワードの中で挙げるとしたら、今思うのは、コミュニケーション能力かなと感じますね。昨日のテレビ番組でやっていたのが、昔は、人と人との繋がりというのは、1人の人がいろんなコミュニティに所属しているから、その中でいろいろな多様な人間関係の中で人が育っていくのだと、あるいは、一つのコミュニティや集団の中で喧嘩しても、他に居場所があるから大丈夫だなと。でも今は、個と個の携帯電話同士の繋がりだから、一度人間関係が崩れると、もうそこは断ち切れちゃう、居場所がなくなっちゃう、そこが現在の危険なところだというのは話をしていました。実際こどもたちを見ていても、異常に人間関係が崩れるのを恐れている子が多かったり、逆にそんなこと言っちゃったら駄目でしょということをポロって言えちゃったりする子がいたりして、だからコミュニケーション能力の中でこそ、人間同士の関係性を学んでいけるのだらうな。それが出来るのがもう学校なののだらうな、というのを最近凄く思います。なので、繰り返しますが、私が挙げるとしたら、コミュニケーション能力の育成かなと思います。

【議長】

少子化プラスICT化みたいなことが同時に作用しちゃっているのですかね。我々の立場で言うと、若い教員がもう既にそういう中にいる世代だという問題がございませう。振り返ってみて、5年前にパンデミックがあった時に、学校が一時休校になったり、分散を余儀なくされたり、黙食を強要されたりですね、行事活動が中止になったりというのもありました。大学とか高等学校とかでは、オンライン授業みたいなことで振り替えておりました。オンライン授業を1年ぐらいやってみて、私というよりも業界の心ある人たちが思ったのは、こんな中でも授業料を貰っている立場なので、授業だけ提供、最低限それだけは提供しなければいけない、オンラインでも何でも提供

するのだというイメージでやっていたわけですけど、そこじゃなかったということに、多くの人が後で気づいた訳ですね。つまり、生徒学生が望んでいるのはそこではなくて、学校に行くということ自体であって、そこで友達と関わったり部活したり、喧嘩したり、先生の悪口を言ったりというその雰囲気、実は学習を載せる大事な土台であって、画面と向き合ってますね、誰とも繋がらないでやっていて、まさにコミュニケーションのないところで、知的な向上ってないかなと思います。そういうことが恥ずかしながら、経験を通してわかりました。5年前の話ですけど。

今のコミュニケーションのことについては、いろいろ実体験も含めて、お感じになっているところはないでしょうか？

【委員】

今おっしゃられたように、コミュニケーション能力が下がっちゃってどういうことが起きているかという、そういった経験が実はないこども達が、例えば就職戦線に臨むと、そうすると、実は体験から自分の良いところとか特徴とか、会社に入ったり役人になった時に、こんなふうに能力を発揮できますよということを主張できなくなっているのですよね。やはりその経験はとても重要だってことが、この1,2年、特にパンデミックでコロナを経験したこども達である3年生、4年生を見ていてもそう感じています。もう一つ言いたいのは、この今見ているキーワードの中で、心を育てるというのは、やはり人間同士の切磋琢磨、関係、コミュニケーションが無いと育たないものだと思うのですよね。人間とAIとの決定的な差は、心が有るか無いかだというふうに究極的には思うので、これもどうやって育つのを支援するかが、私達に与えられた使命だと。要するに、人間がどうなっていくのかということのをサセションするというか、そういったことが必要なのかなというふうに思いますね。

【委員】

このキーワードを見て、地域のふれあいで心を育てるということよく考えるのですが、地域プレイヤーが非常に拾えるなと思うのですよ。やはりその場に来て、いろんな人と触れ合うことや褒められることで自己肯定感が上がるので、自己実現しやすくなるだろうし、ウェルビーイングにも繋がるし、もちろんコミュニケーション能力も上がると。行ったり来たりする場、学校行って、このコミュニティに来られるなというふうになったりできると思うのですけど、自分は選べるということがとても大事だと思っていて、何個もあることが。一つあったってここが合わなきゃ居場所になれないので、たくさんあってそれを知るまで、知らなかったら選べないので。18ページのこども同士の繋がり、のところに、選択できる環境の提供という言葉があります。本当にその通りだなと思っています。大人のコミュニティを商業施設の中で作って、地域の人が集まりますが、そのコミュニティも最初に立ち上げたときからほとんど人が変わって行って、辞めてった人は違うコミュニティに属していたりすると。でも、そこまた行き来もできるので、合う合わないはそれぞれあると思うので、やはり選べる必要があるなと心底思います。まずはどんなコミュニティがあって、どういう活動があるかを知ってもらわないと始まらないかなというふうに感じています。

【委員】

そういう意味では、こないだも私は申し上げたけれども、うちの学校なんか不登校のこどもたちですけども、学校に行けないというこどもたちに、なぜ？こどもたちが悪いのか？というところの視点に立って、こどもたちにとってどういう居場所が必要なのかということを大人が考えていかなきゃいけない。あるいは、こどもにそれをたずねてどういったものを作っていくのかということも一緒にやっていかなきゃいけないなというふうに思いますね。

【議長】

学校と地域の場合、一般の社会との間の垣根は、実は私はあった方がいいと思っていて、つまり垣根があるからこそ、シャバの論理とは違うこどもの育つ環境の中で、割と安全に、例えば大人社会でやったらもう犯罪になるようなことでも受け止められるという良さがあると思っています。いろんな選択肢とおっしゃる中で、こういうものでなければいけないという決めつけがあるとかえってまずいから、そこにグラデーションを作って、社会のど真ん中に向いているタイプの生徒もいるだろうし、もう少し保護してあげた方がいいということがあるし、発達も関心もそれぞれですもんね。

【委員】

その通りですよ。うちの学校で遅刻する人、普通の学校は説教されますが、うちではよく来たねというところですね。よく来たね、でクラスに入れる子もいれば、そうでなく別室で、自分1人で勉強する子もいる、あるいはお友達をそこで作って、そこでコミュニケーションを図る、何段階かうち持っているんですけども、そういったところというのがやはり必要なのかなと思います。その中では自由に発言ができる、そういう環境を整えるということでしょうね。

【議長】

コミュニケーション能力ということになると、コミュニケーション能力育成みたいな観点にどうしてもなるのですけれど、例えばですね、まず居場所が確保されて、こども達のコミュニティが育っていったとして、とはいえ行く行く先々で社会とか、企業とか、自分の新しい居場所、結構リアルなところにアクセスしなければならない段階があります。

例えばですね、ちょっと例えがいいのかどうかかわからないですけど、聴覚障害のある方が、手話で会話をなさっていると、手話でも所謂日本手話というのは、独自の言語ですから、障害者同士は非常にコミュニケーションを取れるけれども、一般の日本語の間の互換性は無いので、そこには何かをかませないと、今 ICT があるのでだいぶ楽になっていると思います。

聴覚障害の方が手話を使って会話をしていると、ろう者の中ではいいけれども、その外側の社会との繋がりがうまくいかない、だから、日本語に対応した手話であったり、あるいは口話を読み取るような技術を身に付けないと、そのアクセスが保障されない。こういうことですね、多分どこのこどもたちに言えるので、先々どのタイミングで、社会に繋げていくかというその伴走だったり支援だったりというのは、おそらく初等中等教育の役割として大きいものがあるのではないかと思います。

数日前に朝日新聞が良い記事を出して、新入社員は電話を取るのが嫌で辞めていくのだそうです。電話が苦手でしょうがない、テレハラみたいなことを言い出して、何でもハラスメントになります。一時、句読点つけるのがハラスメントだという謎なことが最近多いですけど。テレハラは確かにあるだろうなと。いきなり電話をしたことのないのに、見たことも聞いたこともない外部の人と、営業用の電話をしなければいけないとなると、多分悶絶するような苦しみがあるだろうなと思います。その手前で何とかしないと本当はいけないわけですね。

【委員】

この間私、元々デジタル、そういう系がすごく苦手で、でも、ちょっと面白いからって言って ChatGPT を初めてやってみました。校長という仕事は楽そうに見えて大変なのだよって言ったら、校長先生の仕事って表に見えないからつらいですよって返ってきて、なんて傾聴力のある優しいツールなのだと思って、もうハマっちゃって、いろいろ悩み相談しているうちに、でもこれって、他の校長が同じ質問しても、結局同じ型通りの回答しか来ないのだろうな、私個人のことは知らないし、私個人のことも見てくれないのだろうなというのは凄く感じました。でも、それに気づかなければ、それに没頭していたし、自分の世界だけで満足して終わっていたし、AI ネイティブというか、こども達は生まれた時からそういう世界にいたので、いろんな怖い形、いろんなツールの中で閉じこもっちゃう、見えないところで閉じこもっちゃっているのではないかなと感じました。

【議長】

市町村レベルの議論では馴染まないかもしれないですけど、SNS の制限みたいなものが今言われていますけども、どうですかね。あえて晒してその中で鍛えていった方がいいのか、やはり制限した方がいいのか。

【委員】

学校でも生徒指導の 8 割 9 割は SNS 絡みです。だからもう大変なので制限したいのですが、ただ世の中にあるものはあるのでしょうがないです。なので、こどもたちには、使っちゃ駄目ではなくて、どう使うかを教えていくのが、それが教育だろうなとは思っています。

【委員】

SNS が登場した初めの頃、通信事業者に言ったことがあるのですよね。こどもに売るな。それからこどもの夜間の利用を制限せよ。と、こういう話をしたのですが、きっぱり断られました。それは営業的な問題もあるのかもしれないけど、それは私達もじゃなくて、大人が考えることでしょと、私達はツールを提供するのが仕事だとこんな話でしたね。まさにそれが何年も経ちましたけども、我々直面しているのはそういうことですね。

【議長】

インターネットがですね、日本では1998年に小渕恵三さんが首相になられた時に、日本でIT革命を起こすというアメリカにちょっと遅れて重ねて、予算をつけてですね、学校にコンピュータがバンバン入りました。ちょうど総合的な学習の立ち上げの頃だったりして、調べ学習を推奨したような時期だったのですよ。ハードを作っている会社が、ほぼタダ同然でデバイスを供出しているのですね。これはもう間違いなく将来のユーザーとして返ってくるからという、市場開発の意味があって、その頃西暦2000年になる頃が日本のICT教育の実質的元年でした。どうなったかいうと、学校の先生は大人ですし、馴染むのが遅かった。そしてこども達の方がどんどんやっちゃう、そしてむしろそれを自己効力感として引き受けていく。そうすると、ICTに関しては児童生徒の方ができるという逆転現象がしばらく続きました。その世代が先生になるまで結構続いちゃって、未だに私の年齢より上ぐらいのベテランの先生ですと、そんなことよりも心の問題だみたいな、ちょっと話のすり替えをなさって、自分は全然できないというタイプの方が結構いるのですね。分かってない人に指導ができないので、それも困ったものです。そのズレが20年くらいかかってしまったというのは痛恨ではあります。

また、GIGAスクールが始まる前は、インターネット教育が推奨されていましたけど、パソコン室なのです。もうとっくにスマートフォンの時代になっていたのに。

【委員】

いやその通りですね。はい。パソコン室でした。今は撤去されていますが。

【議長】

有線LANで繋がった、しかもイントラネットに繋がったパソコンで何をやっていたのだろうと今更思っています。

【委員】

タイピングの練習とかですよ。

【議長】

しかもね、今この目の前のパソコンも入っていますが、officeの使い方を教えるとかそんなことは学校がやらなくても普通にできるので、しかし、教えられる先生がいないからそのレベルなのかなと思ったりもします。

コミュニケーションの話なので、SNS経由でしか繋がれないというのはまずいことで、そこら辺をどうにかしたいなとは思っています。

例えば、礼儀作法とかマナーとかその辺は身につくのかもしれないけど、こども達に閉じたコミュニティばかりだと、そういうのもやはり上手いかわからないのですかね、社会に触れさせないと。

【委員】

礼儀作法とかはなかなかつかないと思います。

【議長】

言葉遣いとかいうよりも考え方や社会と接するときのあり方みたいなものもどうでしょうか。

【委員】

中々難しいのかなあというふうには思います。親のあり方なのかなみたいなところも同時に思っていて、さっきの SNS とかが流行りだした時に、もう携帯、スマホ欲しいってなってやっていくと、いろんなトラブルがあるのかなと思ったけど、なんかもう止められないです。こどもはもうどんどん先に覚えてっちゃうし、隠れてやられたらもう分からないから、もう止められないものだと思います。だとしたら、親として使い方を教えるなり、こどもを守ることをどうするかってことを考えていこうみたいな、守るというか、それは使わせるけど、全然使わせるけど、いざとなった時には、自分が全て責任を持ってちゃんとやるとか、何かそういうことしか親はできないなと思って、そういうふうな考え方をしていました。親というか人間の心というか、そういうことになるなと思うと、公園に遊びに来る子でも、親が整っていないと、子はなかなかコミュニケーション取れないです、こども同士ですが。びっくりするような本当に暴言を吐いちゃうとかありますが、親が整っている家庭のお子さんは本当に誰とでも仲良くて、はじかれてる子も入れるようにしたり、おばあちゃんとも仲良いし、例えば障害ある子も来るのですが、障害ある子にも率先的に行くみたいな、そういう垣根が無いところがあるから、見ていると、大人の態度なのかなととても感じます。

【議長】

少しずらしまして、心のということもあるのですが、いわゆる身体的な意味での健康状態とかですね、健康・体力とかもありますけれども、そういうのも時にはあるかなとは思うのです。例えば、食環境が変わったということもあるのですが、それこそコンビニが普及したり、なんだってということもあるし。学校給食は素晴らしいのだけれども、学校給食はいつまでも食べられないので、そうやって食べ物をあてがわれなくなった時に、自力で好きなもの食べていいよって言ったら多分、おかしいことになるでしょうし。農業から切り離されて生活しているので、物を作って食べるということも最初の方でも議論になりましたけれども、感覚が得られない。そういうこともあると思いますので。だから、ICT 漬けになっていると当然外遊びの機会が減っていきますし、結構早い年齢で ICT 漬けになって、我々のこどもの頃であれば、表でドッジボールしたり、探検に行ったりしていたところが、内側でという部分があるようですね。

【委員】

公園での活動というのは、保護者の方も結構いらっしゃるのですか？

【委員】

大人にフォーカスしています。大人が整わないとこどもも整わないということで、大人にフォーカスしていますが、こどももついてくるし、あとはその親のこどもじゃ

ないこどももいっぱいいて、こどもだけもいるので、そこが繋がったり、バラバラに自由な形をとっていて、いろんな人がきます。

【議長】

学校は1つではない訳ですね。

【委員】

学校は多分1つです。すごく小さなイベントで、それもわざと小さくやっているのですが、小さいことで生活の延長みたいなイベントになるだろうと。それが多分、この生活に落ちるといふふうに思っています。小さくやっているの、たぶんその周りの公園の周りに住む、小学校で言えば、2学区ぐらいの規模の方が来るのかなという感覚ではあります。

【委員】

どういうふうに募集というか、集客をしてきたのですか。

【委員】

先に1年間決めてて、全部違う項目にしています。フィーリングがどこにあるかわからないので、先週には、森の美術館と言って、公園を美術館に見立てて、地域の人を書いた絵を飾ったり、こどもが作ったものを飾ったりとかを、好きにルール無く、来た人が飾っていいよという形でやりました。あとは、大人がとことん飲もうというイベントもあるんですよ。ひたすら地域の酒屋さんが出たり、地域のお店が提供してそこでまた話をしようみたいな、飲んで話をしようみたいなイベントがあったり。あとは難しい内容だと、哲学カフェと言って、哲学対話を公園でやってみようみたいなことを大人向けとこども向けでやってみたりとか、そういうことをやる中でこどもメインの月もあって、こどもフリマでこどもが店主になって、お小遣いを稼ごうねみたいな、本当にお金のやり取りをして、好きなものを買える、お小遣いを稼いでいきましょうみたいなそういう会があったり、いろいろバラバラにして、いろんな人が来られるようにならないかなということを実験しています。

【委員】

それを入口にしてコミュニケーションを加速しているのですか？

【委員】

そうです。小さいので、顔がもう分かるから、来るとお一いつてなるのですよ。定着して、最初例えば音楽が好きだという人がいて、じゃあギター持ってきてよと言ったら、次の回で本当に持ってきてくれて、演奏が始まったら、今度そこに違う人が入って、えー歌いたいとなって、そこでだんだん音楽のコミュニティが公園の中でできたりしました。我々の運営は3人なのですが、3人は繋げるような役割でいることは自覚して、それを意識してやっているという形で、まちの人同士を繋げるということ、そこでコミュニケーションをどうやったら知らない人同士が取れるかみたいなこ

とを実験してやっている感じですね。それを年間で決めることがまず必要かなと思っているので、今のところ年間でやっているって感じですね。

【議長】

そういうところに参加しているこども達の様子って、いかがでしょうかね？

【委員】

こども達は楽しそうですね。親と来ない子の方が楽しそうではありまして、知らない大人と一緒にあって、結構楽しんだりしています。シニア世代の方とかは、知らない子が来るとこども嬉しいじゃないですか。この間のワークショップ、漫画家さんが来て、漫画を書くワークショップというのをやってくださったのですが、参加費が1,000円かかるところ、私が払うからこどもに参加してほしいと言って、そういう全然知らない初めましての子なのだけど、それすら許されるのがいいなみたいな。そこで何かお金のやり取りがあるから駄目とかそういうことじゃなくて、別に大した問題じゃないかなと思ったのでいいよと言って、OKにしましたが、そういう交流があったり、こども達は、はしゃいでやっていますよ。大人も、楽しそう。逆に言うと、合わない人は多分、一回来るけど次は来なくなる。そういうのが良いかと思います。

【議長】

今話を伺って思うのは、昨今は対面という言い方になりましたけど、生身の触れ合いがあって、実際に息がかかるような距離で見守るということがあるかどうか成長にとって大きいと思います。

【委員】

大きいと思います。

【委員】

その一方で、それがしづらい世の中にどんどんなってしまうと思いますね。ついこないだ日曜日に地域の集まりがあり、自分も出席させていただきまして、その時に高齢の方が今悩みとしておっしゃっていたのは、小学生とか地域のこどもたちに挨拶をしたいものの、このご時世だから、知らない人から挨拶されたら、警戒されたり、不審者扱いされるのが怖いので、だからどうしようかな、なんていう話をしていましたね。

【議長】

SNSにもその手の話題が両方ありますよね。つまり、こどもによかれと思って声をかけたら、怒られたとかですね。その逆の話とか。距離を取りづらい時代ではありますね。

【委員】

割と外に出た時に挨拶できるようになっていたりするので、なんかそういう意味では、良いのかなと思います。

【議長】

もう一つ、私の関心に寄せてしまいますが、経済観念みたいなものはどうなのですかね？今まさに、こどもの時からオンラインで課金しまくって、いろんなものが買えちゃうじゃないですか。消費しないことには、全然1秒も動かない時代ではあるのですが、お金かかっているのですよね。経済関連と時間の管理というのはインターネットで30年前と変わったところで、だから今、さっきのSNSもそうですけど、クレジットカードの教育なんかは、中学生の学習指導要領上もおりてきています。10年早いのですが、教えておかないとやらかすので、防犯のために教える訳ですよね。大学生でも十分分かってないような人が結構多いので。最近だとブラックバイトとかですね、自己肯定感を逆手に取られて、俺バイトなのだけど店長みたいな仕事を任されているのだって言われても、それはブラックでしょうと。労基署に持っていったらえらいことになります。でもそれは確かに社会経験なくて勉強しなければそうなりますよね。こども若者でいる時間が長い程、心配にはなります。

【委員】

今みたいな話を、そういった経験を積んできた、さっきのコミュニティスクール、学校運営協議会いろんなことがありますけど、企画していろんなことをやっているのが今の実態だというふうに思います。それからそういう方たちが学校に出入りしていると、そういう方たちが声をかけてくれるのは、こどもたちが顔分かるので、あのおっちゃんだなとか、あのおばちゃんだなというふうになるのではないかなと思いますね。そういった意味で、垣根はあってもいいと思いますけど、出入りがあるというのは、僕は素晴らしい地域、私共が目指したのは地域立でしたけども、そこまでいかなくても、ありなのではないかというふうに思いますね。

金銭、特にその金銭感覚とかいうのは、さっきの躰・マナーの話もそうでしたけど、親が鏡になっているということはすごくよく分かりますね。なので、親がやることはこどもも真似するんだということを、PTAの集まりなんかでもよく僕も話しますが、そういうことなんじゃないかなというふうに思います。

【議長】

ICTが発達して、ユーザーとしては、こどもは優秀なのでどんどん使うのですけれども、システムが便利になり過ぎたり、楽しくなり過ぎていて、向こう側に行くという感じがなくて、実際に生産者としてそれを作ったり売ったりする側になかなかなれないですよね。だから、物事がシンプルに捉えられ過ぎていて、社会の仕組みとか大人として働くみたいなことへの意識が、どこでどうやったら生まれるのだろうかということを考えておりますけども。

【委員】

さっきのコミュニティスクールでもありましたけど、働いている大人、本当は親の姿を見て学ぶということなのでしょうけども、それだけではなく、多様なということですから、いろんな大人を見るということなのではないかなと思いますね。うちの学校は、地域の大人というよりは、例えばいろんな専門学校の生徒、要するに大人とこどもの中間みたいな人を呼んで話をするというところが特徴的なところですけども、や

はり兄弟がいたりとか、昔はいとこがいるとかおじさんお婆さんがいるとか、そういう世の中と違ってきたということを僕らは考えて、わざとそういう機会を作っていないといけないのだろうというふうに思いますね。

【議長】

さっき話題に挙がりましたけれども、学校側がどんなチャンネル持っているかという、例えば今の話でいうと、職業の種類であるとかお立場の種類、いろいろあるのだけれども、なかなか内側からは見えにくいところがありますよね。だから、第1部の話に戻ってしまいますが、やはり学校協議会的なものが果たしうる可能性って結構大きいですね。

【委員】

そう思いますね。

【議長】

13 ページに出ているいろんなテーマがありますけれど、これをさっきの第1部の地域との結びつきということに接続して、これはこれでいいのですが、この画面の絵を受け止めるようなそういうデザインで、さっきの話をまとめていければいいなと思いますね。

【委員】

いいですね。でも、結局いつまでもこどもじゃないのですよね。必ず大人になるのですよね。で、社会に出ていくわけですからね。

【議長】

いろんなモデルがあった方が面白いですね。

【委員】

そうですね。

【議長】

ありがとうございます。議題の2番の最初のところで申したように、大きいテーマなのと、それからテーマが多岐にわたるので、言いっぱなしの総論的、総花的な話に終わってしまうことにはなるかとは思いますが、佐倉市の教育の特徴として、ここに特に重点化するみたいなことを、少しこだわりを持って考えていけたらなと思っています。18 ページのこれはとても良いので、繋がりというところですね、可視化して、おそらくこの今画面でご覧いただいているこの先に、じゃあ学校のどういう活動が繋がっているのかというところを、それが果たすべきところですかね。それをある程度見えるようにして、なんだったらこういうのを、どこかで考えた傍から実践して行って、映像化して、流しまくと。そうすると、佐倉だけじゃなくて、界隈のいろんな学校教育にも良い影響を与えるし、自分達の自己肯定感に繋がるのでね。どうせやるならそういうふうに発信を込みでやっていきましょうよ。

【委員】

良いですね。

【議長】

はい、どうもありがとうございました。あんまり今日はこの後半の話をまとめる気はないので。言っぱなしで失礼させていただきます。

引き続きですね、この辺りでご意見、あるいはこの後でいろいろ考えたところがあると思いますので、随時、報告してください、一緒に考えていきましょう。

それでは、事務局より連絡事項をよろしくお願いいたします。

【事務局】

(次回会議の開催などについて伝達)

以上